みやぎ教育文化研究センター

センターつうしん

NO.85

ひと言

『ポケット詩集』のこと

千葉　建夫（センター運営委員）

退職して十二年が過ぎた。教育現場の忙しさは、あの頃から少しも解消されずひどくなっているようだ。「忙」は「心（忄）」と「亡」の形成文字だが、忙しさは心を亡くす。人として大切なことを忘れさせてしまう。この漢字は、作られた時代からずっとそう警告し続けているのでは。

小学校の現場にいた頃、忙しさで心が乾くと管理的になっていた。これではダメだなと思ったとき、よく開いて読んだのが、『ポケット詩集』（童話屋）だった。「くまさん」（まど・みちお）はくすっと笑えて心が温かくなった。「ぼくが　ここに」（同）は、どの子の存在も尊く、「系図」（三木卓）は、かけがえなしの親の愛を感じさせてくれた。「世界は一冊の本」（長田弘）は、教材を見る目を大きく広げてくれたし、忙しさを言い訳にしたくなったとき、「自分の感受性ぐらい」（茨木のり子）が、ひ弱な心を叱ってくれた。

いい詩の言葉は、乾いた心を豊かな心の水脈へと向かわせて、精神を持ち上げてくれる力があった。

教育は柔らかな子どもの心といつも向き合う営みだから、精神の持ち上げ方は人それぞれあると思うけれど、とにかく、忙しさで心を亡くさないようにしなければ。

目次

ひと言　千葉　建夫　1

特集　保健室と子ども・学校
座談会　保健室のいまを語る　2
佐々木未来　佐藤　有希
伊藤　日和　大木　一彦
山岸　利次

座談会を終えて　山岸　利次　12
ある日の保健室・・・　栗原ほたる　13
いま学校に生じている困惑と
子どもの生存権・発達権・学習権　数見　隆生　15

おすすめBOOK
運動部活動の教育学入門　矢部　英寿　16

わたしの出会った先生 16
ヴォルフガング と アンネ　里見まり子　17

子どもと学校
いまどきの小学校事情…とある一日　安藤　知子　18

教育時評　大川小は問いかける　山形　孝夫　20

相談センター
みやぎ教育のつどい不登校分科会の論議から
寺沢　幹緒　22

おすすめ映画　「この世界の片隅に」　加藤　修二　24
センターの動き　24

題字：江島　隆二　表紙写真：菅井　仁

特集

保健室と子ども・学校

座談会　保健室のいまを語る

出席者　佐々木未来（小・養教）
佐藤　有希（小・養教）
伊藤　日和（中・養教）
大木　一彦（中・教諭）
司会　山岸　利次（センター運営委員）

発育測定やケガや病気の手当てをするのが養護教諭の役目と、一昔前であれば思われていたでしょう。しかし今、保健室の活動・養護教諭の仕事は多岐にわたっている。その大きな要因は、子どもたちの生活が生きづらくなっていること、学校に求められている要求が多様化していること、さらには親の養育上の課題や社会のひずみが子どもたちに深刻な問題を投げかけていることなどが考えられます。

そこで今の保健室の状況を、県内の養護教諭と中学校教師の4名の座談会で語り合っていただきました。また、小学校の保健室のある一日の様子を具体的に書いていただきました。座談会と合わせて読んでいただければ、現在の保健室や養護教諭の姿がご理解いただけると思います。

山岸　はじめに保健室から見た子どもや学校ということについて、保健室にやってくる子どもたちの状況や印象など、佐々木先生の方からお話いただければと思います。

佐々木　私は小学校勤務ですが、保健室によく来る子どもたちは低学年の子たちが多いと思います。自分の中の不具合みたいなことをうまく言葉で表現できず、体調が悪いと訴えてきます。ちょっと手当てしたり話をしていくなかで、元気になって、何か解決したわけではないけど、ちょっとがんばってみようかなという思いになっていく。養護教諭はお母さん的なところもあるかもしれません。ちょっと感じたことを表現できて、それを受けとめる場所があるということが大事かなと思っています。

高学年になると、なかなか教室に行きづらくなり保健室登校になっていく子どもたちもたくさんいます。日々のちょっとしたことが大事な部分だということが学校の中でなかなか受けとめてもらえないので、その辺がすごく苦しいところです。保健室へ行きたいと訴えても、「そのぐらい大丈夫なんじゃないか」「我慢すればいいじゃないか」とか、「本当に具合の悪い時だけ行けばいいんじゃないか」という雰囲気が学校の中にあって、保健室に子どもたちがたくさん来れば来るほど養護教諭への校内での風当たりは強くなっていると感じることもあります。

山岸　小学校でも、そういう感じなのですか。では、中学校の伊藤先生、どうでしょうか。

伊藤　現在、勤務している中学校は、不登校が多いところです。転勤した時は、不登校の多さに驚きました。中学校の教員の中には、その理由を、小学校の対応が甘いからとか、嫌われたくなくて強い指導ができないから生徒が弱くなるなど、小学校に原因がある

という教員がいてショックを受けました。以前、小学校に勤務したことがあり、その時は学級担任を始め、みんなで不登校児童に対応していたので、中学校の教員が良く知らないのに簡単に小学校のせいにすることが許せませんでした。そして小学校の責任にしても何の解決にもならないのに、と思いました。ただ、異動などで少しずつ職員メンバーが替っていくにつれて、徐々に職場の雰囲気も変わってきています。以前、ある管理職から「保健室では生徒にあまり寄り添わなくていい」と言われましたが、今の管理職は、生徒に寄り添うことを評価してくれています。人が変わるとこんなにも違うのだなと思います。

山岸　佐藤先生の小学校はいかがでしょうか。

佐藤　今、保健室にくる子どもたちは低学年と高学年に多い傾向があります。低学年は、どこかが痛いという訴えを受けとめてもらえると教室に戻れる子たちがほとんどです。高学年になってくると、授業もどんどん難しくなってきて、学習についていけない子たちが発達に課題を抱えていて、お友達と上手にかかわれないことに気がついたり、そういうことで保健室にくる子たちが多いように感じます。

うちの学校は塾とか習い事に通わせている家庭が多いのですが、子どもの中には本当は疲れてやめたいのだけど、毎日こんなに勉強して何があるのだろうという子や、スポ少でヘトヘトになり月曜、火曜は頭痛がしてお休みするような子が保健室に来ています。私は初任が中学校で、そこから小学校に来ました。今の学校は6年目で、6年生の子たちは入学の時から見てきた子たちなのですが、中学校にいた時は、小学校にいた時に何かできなかったかなという思いがあったりして、それで悩んだ時に相談した方から小学校の6年間を見るとよくわかるよと言われて、小学校に来たという経緯もあるんです。6年間を見ていると、すごく大きく成長する子もいれば、少しずつしか成長できない子もいて、その関わりの中で私も中学校に今度は送り出す立場になり、もうちょっと成長させて、その子の問題を解決してから送り出したいなという思いがあるんですけど、家庭の問題やその子自身の問題、生活環境のことなどもあって、なかなか解決までいかず、すごく難しいなと感じているところです。

山岸　佐々木先生と佐藤先生の話では、低学年と高学年という話が出てきました。さらに高学年だと人間関係の悩みという話も出てきたのですが、保健室にくる子どもだけでなくて、保健室から見えた子どもの状況についてはいかがでしょうか。例えば今の話では、高学年の習い事であるとかスポーツ少年団で忙しいとか、あるいはもうちょっと拡大していくと学力テストとか学力競争での苦しい思いといったこと。あるいは低学年の児童にとって養護教諭は母親代わりということもおっしゃっていましたが、そこから見える家庭の中での子どものあり方など、こうした子どもの状況の話は広げられるでしょうか。一方、中学校は、高校受験などで子どもたちは相当ストレスフルな状況にあったりするのではないかと思いますが、その辺で何か思うことがあれば率直にお話しいただければと思いますが、どうでしょう。

■ 子どもの見方の違い

佐々木　やはり学校自体が学力向上を強く意識し、それを保護者に公開することが求められているので、先生方も自分が担任の時は、子どもたちにどうしてもこれだけは必ず教えないといけないとか、教えてこの力をつけておきたいとか、次年度の学力テストで困るという思いが大前提にあるんですね。でもいろいろな家庭的な状況や友達関係などで非常に苦しくなった子どもにとっては、今この算数の問題をやることよりも、とにかく自分の今、ここを何と

か乗り切らないと明日も学校に来られないかもしれないという状況なのです。また家族の関わりなどで本人は生きるか死ぬかぐらいの状況に置かれていたとしても、なかなかSOSを出せないでいます。長い人生の中では、信頼できる大人に自分の思いをちゃんと聞いてもらえたという経験だったり、友達に本当にわかってもらえるという機会だったり、親に今の自分の思いを伝えられるという、そういう経験の方が、大きくなって成長していくときにすごく大事なものになるのではないかなと考えて、保健室ではじっくり関わろうと思っています。なかなかそれが担任や学校の流れの中でうまく理解してもらえない。ある意味、きちんと関わってあげられないうちにどんどん授業の方に引っ張られてしまうと、小学生は一見表面的に問題が収まるんですよね。「先生あんなこと言っていたけど、きちんと授業にも出れるし、学校にも休まず来ているのだから大丈夫だよ」と収められて、それが何年かしてから出てきたりします。中学校に行ってから出てきたりする。私たちは長い目で低学年の時ああだったから4年生でこうだなとか、そういう見方ができます。きちんと次の学年に引き継ぎがされないと、この子は大丈夫ということで引き継がれるので、どんどん問題が先送りされてしまいます。いわゆる中学校で、小学校で何とかならなかったのかというのは、きちんと解決していないからだと思います。この子が生きていくために大事な人を信頼できるとか、親と向き合うことができたというところを獲得していれば、中学校になってから苦しまずに前に向かって進んでいけたかもしれないのですが。

山岸　子どもを見るその見方が、学力という側面からなのか発達という側面からなのかということでしょうか。もう一つは、1年間でしっかりまとめるという区切りで子どもを見るのか。あるいは、小学校だったら6年間、中学校だったら3年間という長期的なスパンで見るのか。そういうところで養護教諭と一般の教諭とでは、かなり違うのでしょうか。

佐々木　担任全員がそうだと言うわけではありません。こういう課題があるかもしれないと感じ取って、次に引き継いでくださる先生もいます。どの先生もそういうふうになってくれればいいんですけれども。担任にSOSを出せずに、保健室に来ることもできない子どももいます。子どもが訴えて、それこそ扉をたたいてくれれば手は打てるのですが、そこが歯痒い。そのまま、あの子大丈夫かなとずっと見守っていくというケースも何度かありました。

大木　教室に居場所のない子が保健室に行くというのは今も昔も変わらない。変わったのは昔だったらそれがヤンキーだったけど、今だったら発達障害とか不登校傾向の子とかに変化している。あとは、やはり教師はフォーマルに接しなくてはいけないという面が強いと思うんですよ。教師という役職として接しなくてはいけないというのがあるから、彼らが僕らに見せる顔というのはそれに対応する顔になる。そういうことに縛られない顔が見られるのが保健室だと思うのです。それは昔から変わらないと思うんです。

保健室は、僕らに見せない顔を見せているところだから、保健室の先生の情報というのは非常にありがたい。僕らに見せている顔とは違う別な視点から見ています。そっちの方が彼らも解放されて、いろんな顔を見せている。それはとてもありがたいと思ってみています。それをどう受けとめるかというのは、一つには教師側の個人の問題としてありますね。もう一つは学校の体制の問題もあると思うんですよね。

中学校の方がうまくいくときは、少なくとも1年のスパンでは子どもを見ない。子どもたちの成長を3年の

スパンで見る。大体同じ学年集団が3年間持ち上がりで上がっていくというふうになっているので、途中で入れ替わりはあるけど、この子たちを3年間でどう育てようかという感覚が、みなさんの今の話を聞いていると小学校よりはあるという気がします。

少なくとも僕は保健室の先生にいつも感謝しているし、また貴重な情報源です。僕らには見せないどういう顔を生徒達は見せているのかなあという感じでずっととらえていたし、そのあたりがすごくうまくいっているときは、生徒指導もうまくいくという感じはずっとありますね。

山岸　それでは中学校の伊藤先生、どうでしょうか。

伊藤　最近は、発達障害の生徒が多くて、不登校の多くが何らかの発達障害をもっていることが少なくありません。こだわりが強かったり、人との距離感がうまく取れなかったり、空気が読めなかったり、友達関係をうまくつくれず孤立したり、勉強の理解が厳しかったりして、自信をなくし、自己肯定感の低い生徒が不登校になっていくように思います。その他にもリストカットや拒食症など、発達障害の二次障害や精神疾患など、いろいろな生きづらさを抱えている生徒が来室しています。発達障害があっても、家庭がそれを支えられる状態であれば、発達障害の特徴が目立たなくなっていくのですが、家庭環境に恵まれない生徒は、二次障害になってしまい、ますます学校生活に適応できなくなってしまいます。保健室では、生徒が気軽に相談できるような雰囲気をつくるよう努めています。生徒の言葉から様々な問題に気づくことがあり、担任や生徒指導の先生と情報を共有するようにしています。

ただ、発達障害の場合、学校のルールを守れないことも多く、学校側も障害を理解し、障害に合った対応をしなければならないのに、特別扱いできないということがあります。本当は特別扱いではなく、合理的配慮なのですが。発達障害の場合、環境次第で良くも悪くもなるので、環境調整がとても大事ですが、私の職場は、他の生徒への影響を考え、特別扱いはできないと考えてしまうことが少なくありません。そのため、適応できない生徒が保健室に来るのですが、保健室で受け入れるからそっちへ行くのだから、保健室を閉めて欲しいと言われたことがあります。「保健室を閉めたら、その子の居場所がなくなるんじゃないですか?」と反論したら、「保健室にばかりいたら勉強ができない。中途半端に居場所をつくるより、居場所をなくし、一日も早くフリースクールなどの外部機関に繋ぐことが、その子のためになる」と言われたこともありました。もちろん、勉強は大事ですが、何かをがんばる力って、安心できる居場所があるとか、安全が保障されているとか、認められているなど、そのような心の安定の上に、自己実現の欲求が生まれてくると思うので、居場所をなくすってどういうことだろうと悲しくなりました。

■ 誰が子どもの成長に責任をもつのか?

大木　今の話は最悪ですよね。居場所をなくして、いかに相手に拒否されようと、俺が出ていくという昔の熱血系だとか暴力教師の方が、誤解を恐れずに言うとまだましという感じがしますね。自分の責任として引き受けようとしているわけですからね。ここま

でひどい例はなかなかないですよ。まださっき言ったみたいに俺がやってやるんだという方が、うまくいかないと思うけど心情的にはわかりますね。今の話を聞いたら、自分が引き受ける気もないのに何を言っているんだよという感じになりますけどね。学校がだんだん事務的になってくるとそうなっていく危険性が高まるということですよね。

佐々木　今の子どもたちの課題は、その子の発達上のことや、家庭の人間関係や経済的なことなどいろんな問題が絡んでいます。担任の先生が一人で全部背負うというのは難しいと思います。ただ一方では保健室やコーディネーターや教育相談、それこそスクール・ソーシャルワーカーなど、いろんな人や関係機関がかかわることで、いわゆる担任の先生は「自分のクラスの子だから」、「この子を何とかしよう」みたいなところが逆にどんどん薄れて、人のせいになっていくようにも思います。家のせいだとか発達障害のせいだとか、相談機関が何とかしてくれるんじゃないか。そういう発想になっていくのです。いろいろ家庭的に問題があると、児童相談所が何とかしてくれるのではないかみたいな方にどんどん行くのです。居心地のいい学校の環境を自分はどうしたらつくっていけるのか、この子とどう向き合ったらいいのかというところになかなかいこうとしないこともあります。自分のできることは何なのかというところに戻れればいいのですけど、そうではなく、何だか他人事になってしまうのです。そこのところがすごくもどかしくて、子どもが苦しんでいるので、保健室で関わろうとすると抱えすぎだとか寄り添いすぎだと言われることがあります。

大木　確かに担任は一人で抱えきれない。もちろん保健室だけでも抱えきれないということはたくさんあるんだけれども、なんか勝負するところが違ってきているんじゃないかなと時々思うんですね。

僕も関係機関とかの会議をいろいろやってみたりするんだけど、相談された側もあまりにもいっぱいケースを抱え、児童相談所もスタッフが足りないから、会議は開いてくれるのだけど、ではうちで責任を持つとは誰も言わないから、向こうの対応も同じになっちゃいますね。会議を開いた結果、また戻ってきて結局何だったんだろう？　という感じになる。いろいろやっていって最終的に、これは結局は親と学校でがんばれっていうことだなと、相談してみて思いました。

そんな中で、僕なんかだと自分がこうやろうと思っても、この子は絶対うまく行かないというような場合、こちらが信頼している人の前で私たちには見せないその子の顔を出してもらえた方がいいわけですよ。例えば僕が指導した結果、学校から飛び出して行くより保健室に行ってもらった方がありがたい。そうすると別の顔が見られるわけじゃないですか。保健室で僕への不満とかをいっぱい言ってもらって、カバーしてもらわなくてもいいからこんなことを言っていたよと伝えてもらえると、一番ありがたい。でも、なかなかそうはなりにくい。さっきも言ったけど、全部自分の責任じゃないところにというのが多くなってきているんではないですかね。

佐々木　私は常に自分に言い聞かせているのは、とにかく自分で全部を解決できないけれど、今できることをやるしかない。「これをやってどうなるの？」とか、「今、この子が保健室に行って何が解決するの？」と考えてもすぐにはわからないけど、発達の課題に向き合って支援することに意味があると信じて関わっています。

山岸　佐藤先生はどうでしょうか。

佐藤　保健室というのはどの子も選んでくる。究極は小学校なら6年間いても一回も保健室に来ない子もいるわけで、自分で選んでくるんですよね。だから選んできてくれたからには、私もその子

と向き合ったり寄り添ったり、そういう関わりをしてあげたいなと思って関わっている。養護教諭は学校には私一人なので、一対一で関わっているときはいいんですけど、他の子たちが多数来ているときは、その子には十分関わることはできない。その子は今、誰か信頼できる大人が必要で、寄り添ってあげる大人が必要だけれども、思っているとおりには私も動けない。それなら学校内で役割分担をちゃんとできればいいのかなと思ったところで、うちの学校は忙しくて職員室には誰もいないんですね。それではどうするかというと、その子にみんなと同じように保健室を使うためのルールを守ってもらわなくてはいけないということになる。でも、その子にとっては、それがすごく苦痛だったりして、すごく難しいなと思いながら関わっている。本当に生きづらさを抱えている子たちだなと。家庭環境とかを聞いていても土台の信頼感とか安心・安全というところがすごく不安定で、逆円錐のような感じの子たちが多くて、常にグラグラしている子が多いなぁと感じています。そこの土台になるものをつくってあげたいけど難しい。以前ある先生に、いつかその子が大人になった時、あの先生は信頼できたな、だから大人を信じてみようかなと思えるように関わったらいいんじゃないというアドバイスをいただいて、今はそれを心の支えにして毎日関わっています。でも毎日苦しい、嫌だと訴えてくる子たちに応えられているのかな？　と思いながらの日々ですね。

お母さんたちは必死に勉強とか、英語やらせてあげたい、水泳で体力もつけさせてあげたいとか一生懸命なのです。だけど何か視点がずれているというか。この前もある子が、「英検に合格しました。漢検も持っています。週一回だけがお休みの日です。それで、私は遊ぶ暇もありません。外遊びする暇もありません」と言ってきたのです。自分は漢検を持っていて、他の子たちよりもちょっと進んでいるという自信もあるのですが、そのことをあえて訴えてくるということの裏側に、本当は違うことをしたいのかなということも感じたりするのですね。だけど、お母さんは行った方がいいよと言う。そのお母さんの期待に応えたい。まだ低学年でお母さん大好きだし、お母さんに認められたいという思いとかが、その子を今は支えているのかなと思ったりするんです。でも、それが中学校、高校になったとき、どうなっていくのかなとすごく心配になるところもあります。今は彼女を受けとめて「すごいね、がんばっているんだね」と話しています。だけど、その子は箸の持ち方ができないし、スプーンは上握りなのです。だから、今の時期に大事にするものの優先順位が違うのかなと感じることがあります。お勉強はできて、しゃべることも文章力もあるんだけど、何かが抜け落ちて大人になっていくのじゃないかなと思ってしまうところがあります。なかなかケースケースで違うけど、その関わり方が難しいと思います。

■子どもをどう受けとめ、対応していくのか

山岸　やはり保健室や養護教諭の先生からみた子どもの課題の見え方があって、寄り添うとか受け入れるとか、そういう対応というのが本当に学校で必要になっているように思います。先生方がおっしゃってくださった課題というのは、本当に、今、学校が直面して対応しなければいけない課題だと思うのですが、ただそこが管理職であるとか一般の教員とうまく連携というか、見方が共有できない。そこら辺はどうでしょうかね。センター運営委員の数見先生が、東京あたりだと保健室、養護教諭は、甘やかし場所だという一方的な見方が現れ始めているというようなことをおっしゃっていましたけど。

大木　僕のまわりの一般的な見方としては、ありがたいと思ってい

ます。逆にまったく受け入れない養護教諭だったりすると大変ですよ。結局、別な情報が入ってこなくなって、問題が闇に埋もれていくだけ。例えば、教室にフィットしない子が、いろんな形で保健室に行き出すわけですよ。不登校になる場合とか、ある特定の教科だけいなくなったりする場合もあるわけです。俺の時間ばっかり保健室に行ってと思っている人もいるかもしれないけど、それも一つの信号だから。特定の教科で生徒がいなくなっても、あいつここからは逃げているんだよねという感じで共有している。だからといって、その教師の授業のスタイルを変えられるかというとなかなかそうもいかないから、そういう保健室というクッションがあるといい。そこがなくなると後は飛び出していくしかないんですよ。

山岸　さっきの伊藤先生の話はかなり衝撃的で、保健室が居場所をつくらなければという……。さすがにそういう先生は例外ですよね。生徒指導とかが今は権威主義的になってきて、高圧的になっているとも聞きます。そのような指導をしながら、しかも逃げ場所はつくらない。なんだったら不登校でもかまわないぐらいな感じの先生が逆に増えたりしないかという怖さが、ちょっとあるんですけれども。

大木　高圧的な指導は昔の方がもっとあった気がします。むしろ今は事務的な生徒指導と言ったらいいのかな。

佐々木　熱血でもなく、思いも感じられない……。

大木　まだ高圧的な方が、それなりに思いを持っていたりするけど、それもなくシャット・アウトしてしまうという。さっきの怖さは、そこですよね。非常に事務処理的だよね。

山岸　広島県福山市のゼロ・トレランス指導は、本当に事務処理的です。昔の熱血先生は、ちゃんと生徒の背景とか状況を考えてやっていたんですけれども、ゼロ・トレランスだと何回違反行為をやると機械的に別室指導とか、そういう感じになってしまう。教師の裁量的な判断がそこに入り込む余地はない。

大木　以前だと、バンと殴ったりいろんなことしてシャット・アウトするけど、でもその裏で飯を食わせてやったりだとか、そういう感じがあって、そちらとも僕は価値観が合わないと思ってはいるけど、でもその方がぶつかり甲斐もある。

佐々木　私の小学校の子どもたちが進学する中学校は、結構、教室に行けない子とか不登校もいるみたいで、別室というのが用意されていて空き時間の先生が必ずいるのです。保健室みたいにそこに行きたいと言って子どもが来て、でも、そこには話したい人がいるというわけではないようです。毎時間空き時間の先生がそこに座っているから、どうぞ来たいときに来て、勉強して、帰りたいとき帰っていいですよみたいになっているのだと思います。「教室に行けないなら、ここで勉強していいですよ」「勉強しているんだったらいいですよ」。安心とか安全とか、受けとめるとか、その子のつらさを聴きとるとか、そういうことが大事にされているのでしょうか。うちの学校にもそういう別室は実はあって、そこは勉強できる場所だからいいんです。保健室は学習ができないから行く意味がないみたいな価値観で判断されています。私は子どもが安心できる場所が学校の中にあるということが大切だと思っています。

伊藤　現在の職場は以前から別室はありましたが、機能していなくて、不登校は多いけど誰も利用していませんでした。そのような中、保健室に頻繁に来室する生徒を別室利用をさせようとしたのですが、別室利用のルールが守れず、すぐに保健室に来てしまうという状態でした。発達障害の生徒の中には、既存のルールを守れない場合もあるため、時にはルールを緩めたり、守れそうなルールを決めたりと、その生徒に合わせた対応というか、ルールを守

らせる工夫が必要な場合があります。もともと自己肯定感が低く、少し叱られただけで、人格を全否定されたように反応してしまうある生徒は、叱られることが増えれば増えるほど、ますます適応できなくなってしまいました。別室に適応できる生徒はいいのですが、子どもによっては、そううまくいかない生徒もいます。

佐々木　別室にちゃんと関わってくれる人がいればいいけど、誰も人が関わらないでほったらかしで、場所だけ提供していることで、その子の課題が解決するのか？　ただプリントをやったかやらないかという、そういうことを積み重ねているだけなんでしょう。その子にとって足りないものをきちんと補わないで、学習しているということだけにまわりの大人は満足しています。学校としてはそっちの方が安心なんだと思います。

大木　別室とかは、僕もやってみたり、やめたり試行錯誤ですね。これだけいっぱい数が増えてきて、それで保健室に全部行ってもなかなか大変みたいになってくることも養護の先生によってはあるし、そうしたら別室があった方が良いのではないかとか。後は例えば、最初はその子とよく顔を合わせる教員だけでローテーションを組んでやったりすることもあるんですよ。生徒指導案件で、ちょっと何かあって、その子とはしばらく話してこなくてはいけないというようなときには、今でもそういう対応をするんだけど。それが、あんまりに数が多くなってくると、さっき言ったみたいにローテーションを組んでというふうになっていく。僕も1回やってみて、1年でうまく行かなくてやめたことがある。それはやっぱり試行錯誤の中で、保健室だけのキャパシティーじゃ？　ということがあるけど、でもやってみると機械的になってしまうとかね。学校によっては、話をさせると、そこでまた……というので、新しい仕切りを作ったりと、それこそ囚人部屋みたいに一つの部屋に仕切りがあってみたいになってくる。問題は確かにあって、これだけ数が多くなってくると、適応できない子をどう受け入れていったらいいかという、その試行錯誤中だとは思っているんだけどね。本当は僕なんかでも、思いとしては授業をやりながら、この時間はこの子とも話をしたいなと思うけど、二つ身体がないからということがしょっちゅうあるわけで。始まった当初は、学年の中の何人かで持ち回りしてたりするんだけど、結局その授業とかの関係でなかなか回らなくなってきて、そういうのがあっちからもこっちからも起こってくると、さっき言ったみたいに全体でローテーションしましょうみたいな話になるのは、事情としてはよく起きがちだというのはわかりますね。一番人間的な関わりのほしい生徒に、非人間的になっていくという側面が確かにあるんですよね。

■何が子どもへの関わりを困難にしているのか

山岸　90年代あたりから、保健室というのは「心の居場所」という役割が求められてきました。むしろ保健室だからこそいじめであるとか子どもの抱えている問題というものをキャッチできるという形でクローズアップされたはずなのに、それと今の話は全く違いますよね。大学などでも健康相談活動は養護教諭では必修科目になっていますし、まさに子どもへの相談対応が養護教諭の専門性の一つとして位置づけられています。その一方で、現場では相談活動はやってくれるなとまでは言わないまでも、あまり関わりすぎないようにという感じで、むしろ押さえられている。そのギャップというのは何なのかというのがありますね？

佐藤　学校がとても忙しくなってきて、環境教育やら何やらで、先生方を見ていても忙しいなぁ、やらなくてはならないカリキュラムが多すぎるなってすごく思っています。

子どもに勉強よりも話を聞いてあげる時間と場所が必要かなと

思っても、進んでいくスピードも速いですし、それを後でフォローする職員も時間もないみたいな感じで、先生達も今やらなくちゃだめだといって連れて行くのかなとか思ったりしています。

山岸　養護実習の振り返りの授業で、実習の3週間どうでしたかという質問をするのですが、今年度は先生方が忙しかったという話を学生から聞いたのです。そうした話は初めてのことで、7～8名から言われました。実習生から見て忙しいというのであれば、教員の忙しさは相当だろうなと思っていました。急激に忙しくなったのかは分からないのですが、実習生がそういうことを言うくらい学校は切羽詰まっていて、子どもたちの声を深く問題を掘り下げて対応していくという余裕がなくなっているのでしょうか。

佐藤　居残り学習をやっていると保護者から「うちの子、まだ帰ってきていませんけど」と電話がきたりします。居残りっていうのは、その日にできなかったことを残してやっているじゃないですか。だから予告ができなくて、図工の作品とかで休んだ場合は予告して居残りさせたりはするんですけど、普段の学習は「前もって言っていただかないと困ります」みたいなことで居残り時間がないですし、下校時間も守らなくちゃいけないとか、先生達もすごく苦しいなって思うところがあります。子どもたちも耐性がないとか、すぐ逃げ出すとか、我慢できないとか言われて、すぐ保健室にいく子たちも、すぐ逃げ出すんだからみたいな感じです。でも私は全部、土台が大切だと思います。自己肯定感とか自分はできるとか、自分が大事にされているという気持ちが、我慢したりとか、じゃあもうちょっとやってみようかなと思ってみたりとか、やる気に繋がったりしていくんですよね。そこの基礎の部分がぐらぐらしていて、子どもたちも逃げ出すしかない。苦しいと思っている子たちが増えてきて、でもやらなくてはならないこともいっぱいある。苦しくて保健室に来る子どもたちには、今、お勉強とかじゃなくて信頼感とかきちんと向き合ってボクを見ていてくれるということを感じる時間が大事な時もあるけど、後の学習の保障を担任の先生にお願いできるかとなると難しい。保健室のお手伝いとかさせながら関わっていてもお勉強ができてないので、例えば5年生で2年生3年生からの勉強の復習をしていかなくちゃいけないんだけど、やっぱりそこまでいかなくて、来た時は保健室のお手伝いとかして、教室に戻っていったときは授業で何をしているか分からないけど、とりあえず座っているという時間を過している。その子にそういう時間を過ごさせているというか、その子の時間は巻き戻せない、どうしたらいいのだろうと考えてしまいます。でも保健室に来たときはお話を聞いたりお手伝いをしてもらったりして「できた」って思える体験を少しさせたいなあと思いながら、でも勉強も気になる。そう考えると難しい。中学校までの時間がないと思うと本当にどうしたらいいのだろうと悩んでいます。

■生きづらさに寄り添える安心できる居場所として

山岸　本当に切羽詰まっているのですね。小学校ってまだ余裕があるのかなあと思っていたのですが。最後にこれから養護教諭はどういう役割を担っていくかなどについて、具体的にお話をいただけませんか。

佐々木　課題は山ほどあって、どこからどうしたらいいかということは全く分からないですけど、やはりどの時代であっても変わらないのは、そこに保健室があって、そこに来る子がいたら、誠実に対応するしかない。それを続けていくしかない。どうして保健室に行くのだろう、保健室にばっかり行ってとか、甘やかすなと言われても、こちらとしても子どもが戻る場所はクラスとかみんなで学習できる場所だと思っています。じっくりと話は聞き、関

わりは十分するけども、いずれ集団に戻ってみんなと一緒に活動できるような力を保健室でつけて、元気になって送り出したいという願いを持っています。そのことを先生方に伝えていかないと、いかにもこっち側に引っ張っているように、こちらが囲っているように勘違いされると、甘やかしの場所みたいに思われてしまいます。みなさんが話したように、保健室で関わることで土台となる安心感を持たせたり、自分がこれでいいのだと思える力を持てれば、また集団でがんばれるだろうと願って関わっているのです。そのことを自分自身も忘れないで、また学校の中へも伝えながらがんばっていくしかないのかなあと思っています。

伊藤　これも以前あったことですが、生徒とその保護者の方から保健室登校をさせて欲しいと言われた時、養護の私に話が通されることなく、学年として断っていたということがありました。後日、その保護者の方から、保健室登校を許可しないのは、中学校の方針なのか、それとも自治体の方針なのかと問われ、返答に困ったことがありました。

私としては、別室に適応できない場合は、保健室で引き受けても良いと考えています。しかし、保健室登校を認めると、教室にぎりぎりでいる生徒が引っ張られるかもしれないから認めるべきでないと考える教員もいます。本当にそうでしょうか？　確かに「いいなあ」「自分も保健室登校がしたいなあ」と言う生徒はいるとは思いますが、その生徒も本当に保健室登校になるでしょうか。もしそのような生徒がいたとしたら、それはその子が持っている問題がその時に現れたということであり、解決しなければならない問題を、その子が抱えていたということではないかと思います。生徒が保健室に来ることを、保健室があるからだとか、保健室が甘くしているからなど、安易に保健室のせいにしていないでしょうか。保健室に来る生徒には、来室せざるを得ない理由があるのです。一人で解決できない問題、生きにくさを抱えているのです。保健室は、チーム学校の一員として、そのような生徒を受けとめ、寄り添い、自信を持たせて教室に戻してあげたいという思いで対応しています。

佐藤　保健室に来てくれる子たちには、いつか、将来、成長した時とかに先生は信頼できたなとか、あの先生だから言えたなあとか思ってもらえるような関わりをずっと続けていきたいなあと思うし、一人ひとりが大事なかけがえのない存在だし、そのままでいいんだよと伝えていきたい。あとは身体のことを知らなさすぎる子が多くて、小学校に入って身体の勉強を一緒にする機会があるけど、子どもたちは本当に知らないということと、知った時のすごくうれしそうな顔がとっても素敵で、身体を知ることも自分を大事にする基本・土台になるものだと思うので、身体とか心とかの勉強も一緒にしていけたらなあと思っています。算数とか国語とかも大事なんですけど、どうやって自分の身体ができているかとか、どうやって自分の健康を守るのか、そういうことって何よりも大事だなと思うので、子どもたちに伝えられる養護教諭になりたいと思います。

大木　僕は感謝しています。やっぱりシャット・アウトしている時は養護の先生に関わってもらえないから、全部こちらでしなければならなくて大変だったという思いがある。困難だった生徒って、その当時の養護の先生の顔が全部思い浮かぶのです。あの先生に支えてもらったというのがいっぱいある。だからずっと感謝の思いなのです。今日は養護の先生に嫌な思いをさせている現場の教員がいっぱいいるんだなあと思いました。余裕のない中でそういうことが生まれているということももちろんあるとは思っているので、そこは正していかなければと思いました。

座談会を終えて

山岸利次

今回の座談会は養護教諭3名（小学校2名、中学校1名）と中学校の教諭1名に参加していただき、養護教諭から見た子どもや学校の姿、そして他の教職員との連携や組織としての学校のあり方について話していただきました。時間が過ぎるのがあっという間で、まだまだ聞き足りない（私は司会者でしたので「しゃべり足りない」ではなく）という、盛りたくさんの内容でしたが、司会をさせていただいた者として感想を書かせていただきます。

まず触れておくべきは、養護教諭の先生方の長期的スパンのなかで子どもを見ていくという時間感覚についてです。学級担任の先生は基本的には1年というスパンで子どものことを考え、そのなかで習得すべき知識や技術を習得させようと考えます。中学校では担任が変わっても学年集団が維持されますので、事情が異なるようです。それに対して養護教諭はもう少し長いスパンで子どもを見ていくということが座談会では述べられていました。こうした時間感覚の違いは、学級・学年に捕らわれず学校全体の子どもたちを対象とする養護教諭の先生と1年間責任をもって学級集団の教科指導・生活指導を担当する担任の先生との位置や役割の違いに由来するものと言えるのではないかと思います。

次に印象的だったのは、先の点と関わり、養護教諭の子どもを見るその見方です。養護教諭は「学力」というよりは「発達」という観点から子どもを捉え、個人の発達に即するという観点から子どもとの関わりを考えていらっしゃるように思えました。「発達」と「学力」。両者の要請がともに子どもの中で満たされればいいのかもしれませんが、決してそうはなりません。発達課題は学力に限ったことではありませんし、全ての子どもの発達のスピードや経路が一致するわけではありません。最短距離を直線的に進む子どももいれば、段階的に寄り道をしながら登っていく子どももいるでしょう。こうした多様な子どもたちを前にしたとき、養護教諭は「学力」よりも子どもの「発達」に即して対応しようと心がけていらっしゃるようでした。「発達」と「学力」を対置することは単純化の誹りを免れないかもしれません。しかし、誤解を恐れずに言えば、ゆっくりと時間をかけてその子の課題を乗り越えようという関わりよりも1年間のなかで定められた知識・技能を習得させるということが優先されるような教育・学校状況が存在することも事実です。

最後に、このような立ち位置や子どもの見方といった専門性の違いを理解しつつ実現する連携のあり方ということについても大きな問題提起がなされたと思います。子どもは違った大人には違った顔を見せる。だからこそ、大人同士が子どもの像を共有して子どもを理解していく。こうした連携が求められるということを改めて確認しました。お互いの理解のない連携は無責任な放任や責任の押し付け合いになってしまいます。そうではなく、お互いの専門性や特性を尊重して、みんなで子どもを理解し、教育していく。そうした連携のあり方が模索されなければならないのではないかと思います。

昨年の中教審の「チーム学校」答申や、7月に公表された学習指導要領の「中間まとめ」を読むと、教諭の役割を教科教育に局限しようという意図が見え隠れし、これまで以上に子どもたちの学力達成へのプレッシャーが強まることが懸念されます。のみならず、一人ひとりの子どもの個性や、そうした個性を持った子どもたちによって構成される学級集団の特性に応じて教育の方法や進度を決めていくといった教員の専門的裁量が著しく狭められるという危険がないわけではありません。そして、そうした中で学力向上至上主義とでも言うべき風潮が学校内で生まれかねません。しかし、このような状況だからこそ、養護教諭の先生方と教諭の先生方の双方の位置や見方を活かした学校づくりが必要とされます。今回の座談会がそうしたことの一つの契機になることを願ってやみません。

（センター運営委員）

ある日の保健室・・・

栗原　ほたる

■朝一番に

今日は月曜日。出勤すると2年のさくらさんが保健室の前に立っている。保健室が開くのを待っていたのだろう。心配な妹を私に引き継ぐまで6年生の兄が付き添っていた。「さくらのことをよろしくお願いします」と言って兄は教室に。「今日は保健室にいます。ママのことが心配なので……」唇は紫色で青白い顔、目の周りにはクマができていた。土日に家庭で何かがあったのだろうと推測できた。担任にさくらさんが登校していることを知らせる。さくらさんは3人兄妹の2番目。父親は県外に単身赴任。普段は母親と子どもたちの生活だが、母親は精神疾患を発症し不安定なため、家族が振り回されることが多い。家庭内で起きたトラブルが原因で警察や児童相談所が介入するまでの事件になることもあった。この日の来室の理由は、「ママが台所でウッとなって倒れて……パパに電話して戻って来てもらった」「その後パパは福島に帰って……」母親のことが心配で夜中に何度も目が覚めてと話をしてくれた。「さくらちゃん、山川先生にはお話してあるから心配しないでここにいて良いからね」この日は一度も教室に向かうことはできず保健室で過ごした。

出勤簿に押印し保健室に戻ると、男の子のランドセルが長いすに無造作に置いてある。「えっ？　誰のランドセル？」と思っていると、「ガサガサ」とベッドの下から物音。さくらさんが目で私に合図を送っていた。4年生の太郎君がベッドのしたにうずくまっていた。「家に帰りてぇ。俺は帰ってゲームをするんだ」と叫ぶ。登校したものの、直接保健室に来た彼に「保健室にいることを担任の先生は知らないから……一度教室に行ってから保健室に来たら？」と促してもベッドの下の床に寝転がって教室に向かおうとはしない。太郎君のことでは発達相談を受けに行き、校内でケース会議を開き、今後の対応について方針を決め、本人の居場所と教室を出るときのルールを教職員間で共通理解した。しかし太郎君にとっては窮屈な方針なのだろう。誰が何を言っても最後は隠れるように保健室にやってくる。一時期不登校になりかけた時もあり、行きたくない気持ちを持ちながらもがんばってきたことを褒め、保健室に居ることを認めてあげた。保健室から追い出されないと肌で感じたのか、作りかけていたピタゴラスイッチのビー玉迷路の続きを作り始めた。

8時50分保健室登校の姉妹が母親と登校する。両親の激しい言い争いを目撃し、心に傷を負った姉のみどりさんは、母親が心配で学校に行けなくなってしまったが、その姉を気遣って妹のももかさんも登校できなくなる。今は保健室を居場所にしている。毎日2人の子どもを教室まで送迎している母親の行動に不自然さを感じ、気にかかったので母親に声を掛けたのがきっかけで、子どもたちと関われるようになった。鬱状態で沈んでいる母親は、子育てに自信がなく、誰にも相談できず孤立している状態だった。母親と信頼関係を築きながら子どもに安心感を持ってもらえるように子どもたちと関わり続けてきた。最近は、保健室が安心できる場所だと感じられるようになったのか、教室や7学年の先生との学習ができるようになり変化がみられるようになってきた。今朝は「3時間目は、算数の勉強を教頭先生とするよ」と言って1日の予定を立て始めた。保健室で元気に過ごせるようになった子どもを見て、母親は帰って行った。

■授業中にも

1時間目の最中、廊下からドアを蹴る音。「えっ？　何の音？　何かあったのかな？」音のする方を確認すると、廊下に出した椅子の下に次郎君がうずくまっていた。「どうしたの？　中に入ったら？」と声をかけると、「僕はけがもしてないし……具合も悪くないから……保健室には入れない……」と言いながら両手で椅子の脚を掴み、床に叩き付けながらイライラした気持ちを表現している。しかし

片足だけ保健室のドアにかけ閉まらないように押さえ込んでいる。「何もなくても大丈夫だよ……中に入ったら」と声を掛けても入ろうとしない。「大丈夫だよ。担任の先生は怒らないから……ちゃんと説明してあげるから……みんなもいるから入りなさい」保健室の様子を伺いながら「ウッ……なんだか心臓が痛いです…なんかイライラする……」と言いながらやっと入ってきた。彼は転校してきたのだが、教室に馴染めず、初日から保健室を訪れた子である。授業を抜け出しているところを見つけて声をかけたのがきっかけで関わるようになった。折り紙でウルトラマンを作り気持ちを落ち着かせてあげて教室に戻したのだが、その対応が担任には不満だったのか、以来、保健室は出入り禁止になってしまった。集団から離れて静かなところで落ち着きたいのだろうと思い、担任に保健室にいることを知らせる。保健室に入ると気持ちを切り替えて折り紙で恐竜を作り始めた。

9時40分、保健室登校のゆりさんが登校。夏休み後から欠席が目立ち、このままでは家に引き籠もり、確実に不登校になると思われる子どもだった。母親に保健室という居場所もあることを伝えた。母と二人で保健室体験をし、翌日から一人で登校してきている。10歳の時期に初めて「学校は楽しくない……学校に行きたくない……」と母親の前で泣いて訴えた。昨年からの様子をみても、感情表現がなく場面緘黙症の様に学校ではほとんど誰ともしゃべらずクラスの友達に後ろから付いて行く子どもで、自分の気持ちをどこで表現しているのか気になっていた子どもであった。3歳の時に家庭環境が大きく変わり、親子関係の修復が必要な子どもである。小さな集団の中で認められ評価されることを通して、自分と向き合い、少しずつ元気を取り戻し、明るい顔をして学校にいられるようになった。今日も大好きな絵を描いて過ごしている。

■ 賑わう業間休み そして午前の後半は

業間休み。けが人や具合が悪い子どもたちで賑わう。そこへ6年生男子数名が来室。ソファーを占領し体温計を脇の下に挟み「何度だったら早退できる?」と聞いてきた。「家に帰りてー　家に帰って休みてー　37・5度になんないかなー」と訴える瞬君……。瞬君は以前、「あー、ここは落ち着くなぁ。この感じが良いんだよなぁ。この臭いが良いんだよなぁ」と独り言を言っていたことがある。彼は、男子の間ではボス的な存在で勉強もスポーツもできるので周囲からは一目置かれている子どもである。なぜそんなに家に帰りたいのか問い質すと「土日は1日15時間の家庭学習。平日は毎日10時まで塾に行っているから疲れている」とのこと。彼は兄と同じ中高一貫校を受験する予定で、いつも比べられている兄を見返してやりたいという気持ちを持っていて受検に失敗するわけにはいかないのである。

3・4校時は1年生が3名。これまでも何度か体調不良で来室しているあかねさん。そこへあきら君とそら君が来室。教室を離れて個別に関わってもらうことで気持ちを落ち着かせていた。この日、学級担任は休暇。

■ みんなで昼食?

12時25分、4校時終了のチャイムが鳴る。給食の準備が終わると糖尿病のさつきさんが血糖値を測りに来室。血糖値とインスリンの量を確認し自己注射する間、10を数えて見守る。給食が始まると、友達に給食を届けてもらう子、自分で取りに行ける子、教室まで付き添い廊下で給食を受け取る子など様々。今日は1年生の3人も加わり保健室でランチタイム。たまたま保健室で出会った子ども同士だがニコニコと喜んで給食を食べていた。子どもたちの食事の合間を見て体調不良の柚さんの親に電話をかける……。あーあ、今日も給食を食べることができなかった……。

16時30分、下校時刻と同時に6年生の愛さんが友達と別れて一人で来室。「ママは夜勤だから……今日は、愛一人なんだ……」と、寂しさを堪えている彼女は、3年生までベビーホテルで生活していた。もっと丁寧に話を聴いてあげたいのだが、下校時刻も過ぎたので昇降口まで見送り下校させた。16時50分保健室の机に向かう……。

子どもたちのからだと心の声をしっかり聴いてあげられているだろうか?　と自問自答しながら子どもと向き合う毎日……。保健室の仕事って「子どもの生きる」に関わっているのだと今日も痛感する一日でした。

（仙台・小学校）

いま学校に生じている困惑と子どもの生存権・発達権・学習権

数見隆生

子どもたちに広がっている生きづらさとその背景

ここ数年、学校の教員たちの研修会や養護教諭のサークル等に参加して、また東北や関東の教育実習校などを学校訪問して感じることは、子どもたちに様々な発達困難や生きづらさが広がっていて、そうした子どもたちに十分対応しきれないでもがき困惑している学校や教員が増えているのでないかという心配がある。

その子どもの生きづらさや発達困難の背景には、明らかに今日社会における幼少期からの発達環境に起因する問題が増幅しているように思われる。経済格差、生活格差、学力格差など様々な社会格差の矛盾の中で、十分な愛着（アタッチメント）を受けられないで育った子ども、幼少期に親や家庭で育まれるべき生活規範等（基本的生活習慣、人間関係や社会性の基礎）が不足している子どもが確実に増えている気がする。また東北の地域では、大震災とそれを引きずった問題が背景に絡んでいて、子ども自身に責任のない社会背景のもとで、こうした現象が広がり、子どもたちにのしかかっているようにも思う。

幼少期からのこうした問題は、学齢期に生じている学校に行かれない不登校問題、教室にいられない子どもの問題、いじめ等の人間関係に苦悩している子どもの問題、更には思春期以降の自死や殺傷事件に追い込まれている問題などとも無関係ではないであろう。

学校の困惑と対応の困難さの中で生じている問題

今日の子どもの問題には、こうした社会的背景を背負った課題が多いだけに、学校だけでは応じきれない困難さが生じていると考えられる。しかし社会問題として、学校や教育界は手をこまねいていていい問題とも思えない。学校における対応上の困惑には、今日の教育政策上の問題や学校教育の果たすべき役割の歪み（理念上の問題）が絡んでいるように私には思えてならないのである。

座談会で話されているような養護教諭と担任（一般教員）との不協和や思いのすれ違いは、職種の違いや教育観のズレに起因している面もあるが、むしろその背後にある教育政策上の思惑の歪みを学校と教員は背負わされていることに起因していると私は思う。

例えば、先にあげた生きづらさを背負った子ども（「甘えたい・かまってもらいたい子」「人間関係の取れない子」など）が教室をエスケープし、保健室に頻回訪問した場合の対応のズレの問題である。養護教諭はまずはそういう子どもの気持ちを受けとめ、心を癒し、安心と平穏の気持ちを引き出さなければ教室での授業参加は無理と考えるが、担任はそれを甘やかしと捉え、学習に差し障るとの観点から即教室復帰を求めたり、保健室に行かせないといった対応をとる、といったズレの問題である。こうした対応のズレは、単なる職種の違いや個人的な教育観の相違を超えて、今日的政策の矛盾が背景にある。

近年、国はインクルーシブ教育の理念（健常児と障害児を区別せず、社会に出てからの協同関係を生み出すためには、学校時代から共に学び合う経験が必要との考え）から通常学校で発達障害の子と共存する学校づくりを押しすすめようとしながら、他方では学力テストの実施やその公表による競争主義の教育を推し進め、管理職を含め教員はその相反する両面のプレッシャーと多忙さに追い込まれ、もがきの環境下に立たされているのである。

愛着障害や発達障害を負った子にとって、保健室での養護教諭の寄り添いや癒しの営みは、文科省のいう「合理的配慮」であり重要な「環境調整」機能なのだが、学力競争と教員評価のもとに置かれた担任教員にとっては保健室滞在は避けたい意識を誘発する。

学校として大事なこと～生存権・発達権・学習権を保障する取り組みを

教育活動の不協和の背景には、一方で「チーム学校」という連携を強調しつつも、他方で教職員の一体化・共同に水をさす管理主義的教員評価を推進している状況がある。同時に、「本来、学校の果たす役割は何なのか」という本質理念を共有し得ない状況下に今の学校は置かれているのではないか、という懸念もよぎる。

学校という場は、元来子どもの自立と共生の活動を通して、一人前の社会人としての人格を育み、送り出す機関である。そういう役目をもって子どもを預かり、成長・発達を促す機関である以上、まずは尊い子どもの命や健康を保障する生存権保障の場でなければならない。昨今、いじめや体罰で尊い命が失われる事態が学校で多発している。津波で多くの命が学校管理下で失う事態も発生した。決してあってはならないことである。

そういう生存権保障を前提にして、次に学校は子どもが一人前の社会人として生きていけるだけの「生きる力」を育む発達保障の場でなければならない。インクルーシブ教育はこの理念を前提としたものである。学力形成を意識する前提に人格の発達を教員は意識しなければならないのである。その上で、学校は発達保障の質的側面である知力を軸とする学習に力を注がねばならないが、そのことも「何のためのどんな学力なのか」が絶えず問われなければならない。受験学力に偏向し、競争原理で子どもを煽り、そうした状況が生存権や発達権までないがしろにしかねない意識や事態を生じさせていないか。

ケア（保護・受容）と教育（発達支援）を一体化させる取り組みをこそ

今日の学校は、子どもの生きづらさの訴え（SOS）をまずしっかり受けとめる場であることが求められている。教員はそういう目と耳を持つことが必要である。すべての教職員がそのことを意識した上で、その苦悩に寄り添い、共感しつつも、その苦難を乗り越え、自立を促す発達支援を行うことが、教育の場で行われるべきことである。

東日本大震災で家族に被災があって心のキズを負った児童生徒に、そのキズに触れないようにと精神科医やカウンセラーにほぼ丸投げしてしまう学校もあったが、ケアをしながらそれを乗り越えさせる発達支援の環境と集団を組織し、それが功を奏した学校もあった。

生存と発達は学校では何よりも優先されるべきであり、その上に学習が成り立つのである。保健室と養護の活動は学習の前提に位置づくものであり、子どもの発達環境として学校に不可欠なものである。かつて生徒の荒れで保健室閉鎖に追い込まれる学校が生じたが、最近の状況は別の観点で保健室の閉塞化が発生しているのではないか。「保健室で甘やかすな、居心地よくするな」「養護教諭はあまり寄り添うな」「本校では保健室登校はさせない」等、教育活動の前提に危うさを感じる状況がある。ケア（保護と受容）の前提なき一方的な発達刺激は子どもを一層苦しめることになる。また、ケアのみで発達支援のない取り組みは、課題解決にはつながらない。

子どもの生存権・発達権を大事に考える学校では、養護教諭と担任が連携し、管理職も含む支援組織が一体と機能している。そういう学校が存在するのも事実であり救いである。

（センター運営委員）

「運動部活動の教育学入門 ―歴史とのダイアローグ」

神谷　拓　著　大修館書店

「自治集団活動としての運動部活動」

例えば中学生。考えていることのかなりの部分を部活動が占めています。それは、上達のことだったり、戦術だったり、対戦相手のことだったりします。喜びだったり、憧れだったり、悩みだったりもします。中学校の３年間で、ざっと計算して１０００時間近くも部活動をすることになります。そして、中学校の教員であれば誰もが、そのような中学生の部活動を指導しています。ところが、その指導は個々の教員に任され、日々悩むのですが、指針になるようなものは極めて限られています。そのような学校の状況で本書が刊行されたことの意義は大きく、学校や教員ではないところも含めて反響が起きています。

大きく広い反響は、神谷氏の部活動を自治集団活動と位置づける主張によるものです。大阪桜宮高校の事件が報道された後も、部活動顧問による体罰やセクハラのニュースは絶えません。人権意識の欠如した顧問の強圧的な指導が、むしろ保護者の間で歓迎されることが今でもあります。これらの顧問一極集中型の部活動の対極に神谷氏の主張があります。

神谷氏は１３０年以上にわたる日本の運動部活動の歴史を振り返ります。その初期の頃から、過熱化、勝利至上主義、対外試合拡大を軸に様々な議論がなされていたことがわかるとともに、今になっても同じ議論が繰り返されていることがわかります。神谷氏はこの歴史と対話（ダイアローグ）することを通して、自治集団活動としての運動部活動を主張します。

最後に神谷氏は、運動部活動の指導について、教師の専門性に基づいた「一足のわらじ」で行うことを読者に呼びかけます。競技スポーツの指導者と教育の専門家である教師という「二足のわらじ」をはいて運動部活動指導を行いがちである実際の指導者にとって、大切な指針となることは間違いありません。

矢部英寿（多賀城中）

おすすめBOOK

わたしの出会った先生 16

ヴォルフガングとアンネ

里見 まり子

１９７４年３月に大学を卒業した私は、その年の夏に神戸港を発ちロシア経由でドイツに渡った。父の勧めで、ドイツへの直行便ではなく、船と電車を乗り継いでモスクワへ。モスクワからは空路でフランクフルトに到着した。留学先は、ケルンにあるドイツ体育大学。ドイツの体操について学び1年後に帰国するが、その後、夫と共に再び同大学に留学。長女を出産して子育てをしながら5年半の学生生活を緑豊かなケルンの郊外で過ごした。

二度目の留学では、〝演技―音楽―ダンス〟の総合コースを専攻した。動きで演じる〝ムーブメントシアター〟をヴォルフガング・ティートから、ダンスはアンネ・ティートから学んだ。この二人から学んだ即興の理論と実践の方法は、私が宮城教育大学で取り組んだ表現教育の授業づくりの基礎となった。日本での即興は、偶然性を楽しむ表現活動とされているが、ドイツでは、学習の方法として、また創作活動を指導する方法として確立している。ある時、ピアノの前に座っている私に「さあ、マリコ、自由に即興演奏してごらん！」とヴォルフガングが言った。突然そう言われて私は固まってしまった。すると彼はつぎに「じゃあ、課題を設けよう！　親指と人差し指の2本だけを使って、音を長く響かせたり短く鳴らしたり……これだと演奏できるかい？」と。私は2本の指を鍵盤の上で構え、音の響きに耳を傾け、即興演奏を楽しんだ。同時に2本の指を使いこなすことや音の響きの長短を工夫して組み合わせることなど私にとって発見がいくつかあった。このことを通して即興が課題の解決方法を探り試みることで学びの活動となるということや、新たな表現を生みだす創作活動の有効な方法であることを改めて理解したのだった。

ヴォルフガングとアンネは夫婦で一人息子がいる。彼らは夏の休暇がはじまると決まってスペインに出かける。ある夏、私たちも彼らとともに休暇を過ごすことにした。電車に乗りパリ経由でスペインに入り、小さな海辺の田舎町に到着した。車で迎えに来てくれたヴォルフガングは、日焼けした顔に満面の笑み、心身ともにすっかり解放されている様子だった。彼らの過ごすビーチには、彼らのキャンピングカーと友だち家族のキャンピングカーだけがあり、あとは白い砂浜と青い空、そしてエメラルドグリーンの海がどこまでも広がっていた。私たちは彼らのキャンピングカーのすぐ横にテントを張った。ある晩のこと、私は激しい雨音とビュービューと唸る風の音で目を覚ました。そして、誰かがテントの外で叫んでいるのに気がついた。恐る恐るテントから顔を出して外の様子を伺った。そこには、今にも風に飛ばされそうになっている私たちのテントを両手で鷲づかみにし、両足を踏ん張り「大丈夫かー！」と繰り返し叫んでいるヴォルフガングの姿があった。彼のお陰で翌日、私たちは無事テントの中で目覚めることができた。

４年前の春、私は再びケルンへ。ティート家に居候しながら大学院の授業を聴講した。二人は、すでに退職していたが、特別に大学院の授業を担当していた。この時、私は幸いにも即興理論の講義を再び受けることができた。その授業で手渡された即興についての資料をこれからの日本の表現教育に生かすことは、アンネからもらった大切な宿題だと思っている。

ケルンを発つ前日、彼らが退職してからはじめたというコーラスの練習に誘われた。古いレンガ造りの建物の前で車を降り、階段を登っていくと楽しそうな話し声が聞こえてきた。ドアを開けると20人程の合唱仲間がいた。メンバーに紹介してもらって私も仲間入り。みんなのからだが揺れてウキウキワクワク声が弾む。アンネはリーダー役、ヴォルフガングはまるで子どものようにはしゃいでいる。練習の後は、庭に面したレストランで乾杯！　次のコーラス旅行の話で盛り上がっていた。

ヴォルフガングとアンネは、私にとって不思議な存在である。恩師であり友人でもある、そして家族のような存在でもあるのだ。彼らと出会えたからこそ今の私がいる。

（宮城教育大学・特任教授）

いまどきの小学校事情…とある一日

～20年前と変わったもの・変わらないもの～

安藤知子

教員生活もいつの間にか20年を超え、気がつけばすっかりベテランとみられる年頃になりました。若いころは、1年生の学年主任は、年輩の経験豊かな先生がやるものと思っていたのに、自分が2年も連続でそれをやる時代がやってくるとは！　そんなわけで、今年は2年連続の1年生担任です。それにしても、10年ひと昔とはよくいったもので、教育の現場も様変わりしたなあと思う一方で、変わらないなあと思うことも。そんな日々漠然と感じていることのつぶやきです。

＊＊＊11月某日＊＊＊

朝、教室に入った途端にトラブルの場面に出くわす。落ち着きのないRくん、クラスのドアの前で、友だちが隙間に指を入れているのを分かっていて、後ろからいきなりどついて笑っている。「笑ってやるようなことではない。けがをさせてからでは取り返しがつかない」と話しても、そのときだけ神妙な顔で、いつも終わり。またへらへらと笑って同じことを繰り返す。何度同じことを話しても入っていかない。私の眉間のしわだけが深くなる。こういう子、昔はいなかった気がする。お母さんは「そういうことをする子じゃなかったんですけど。学校に入ると、周りの子に影響されて変わるんですね」でにべもない。

今日は久しぶりにクラス全員が揃った。しばらく学校を休んでいたSちゃんがやっと登校してきたからだ。笑顔で過ごしているのを見てひと安心。お母さんがうつ状態の子って、最近よく見聞きするようになった。親が安定しないと、子どももやっぱり安定しない。お母さんの調子が悪いことが続くと、学校をすぐ休んでしまう。シングルマザーで収入がないって、どうやって暮らしているんだろう。個人情報保護と言われるから、踏み込んでなんて聞けない。貧困家庭が増えているっていうけど、集金持ってこないとか、ご飯食べてないから痩せてて毎日同じ服で、みたいにわかりやすくない。外から見てても、実情がつかめないのが心配である。

学習発表会の絵を描く。絵の具の使い方を徹底させたくて、ついつい口うるさくなる。「絵の具はまず小さいお部屋に出すんだってば。広いお部屋に直接出さないで」「パレットは手に持って。絵の上に置かないで。作品が汚れちゃうよ」「筆を洗うのは、2回。広いところで仕上げに濯ぐの」絵の具の使い方を指導する度、同じことを言っている。自分でもうんざり。1年生で身に付けさせておきたいことって、山のようにあるのに、どうして言ってることを聞いて覚えようとしないんだろう。黒板に張ってる図も全然見ようとしない。今年の子たちは、とにかく人の話が入らない。ああ、血圧上がる。

国語で「いろいろなふね」という説明文。1学期は、初発の音読はいつも拾い読みで、読みも成立しないほどひどかったのに、学習発表会でさんざんやったせいか、口が開くようになり、はっきりすらすらと読めるようになっていて驚く。大いにほめる。やっとできるようになった！　こんな時は、やっぱり手放しで嬉しい。

算数は、繰り上がりの足し算。1年生算数の山場のひとつ。教科書ではやらないけど、位取りを意識させたいから、自作の、数の部屋の掲示物を使って、筆算もさせている。筆算に補助数字もつけると、間違いが少ない。「ばっちりだね」と声をかけると「よっしゃ！」と張り切る。子どもたちは、いつの時代も新しいことを知るのが好きだし、分かると楽しい顔をする。その顔を見たくて、相も変わらず「ここはどうやって教えようかな。あの子たちにはどう教えたら分かるかな」と毎回考える。そんなときは「難しいことをやさしく」井上ひさしさんのフレーズが頭の中に浮かぶ。分かりやすいのがいちばん。そして、学ぶのは面白い

ことだと気づいてほしい。1年生でも、他の子の言ってることを聞いて「へえ、そういう考え方があるんだ」って思えるような授業がしたい。手をきちんと挙げなくてもいいから、思ったことはふと口にできる、そんな集団で学ぶ楽しさがある授業がいい。それは昔から変わらず思っている。

若いころに聞いた「教科書を教える・教科書で教える」の違いがこの年になるとよくわかる。教科書どおりが基本です、どの先生がやっても同じになるようやり方を統一すべき、と主張する先生って最近ときどきいるけど、ちゃんと教材研究すれば、教科書のおかしな点って見えてくるはず。誰が教えても同じなんて、そんな授業どこが面白いの？　20代に教育研究集会やいろいろな学習会で育ててもらったことが、私の大きな財産になっている。その財産を、私は下の世代にうまく受け継いでいけている？　そんなことも、最近よく考える。これは自分が変わったところ。

本当は支援級の判断で知的障害のSくん。そばに誰かがつきっきりでないと、教科書やノートにいたずら書きや殴り書きが始まる。鉛筆を鼻に入れたり椅子に座っていられなかったりと何も進まない。まだひらがなもままならなくて、絵本は字のないものしか選ばない。それなのに、漢字だカタカナだとやることが押し寄せるから、机に突っ伏して「しょうがっこうのおべんきょう、むずかしい～」とよくこぼす。今日は少人数の先生に補助を頼んだ。一日中みんなと同じ課題は、彼には大変すぎて、疲れてくると乱暴になったり泣いてぐずったりする。たまにはゆっくり自分のペースで学習させてあげたい。クラスには、同じく就学前からアーチルに通っている支援級判断のTくんもいるけど、どちらも親の希望で普通学級にいる。二十何人いても、親はどうしても自分の子だけを見てるから、ノートのページを順番に使えないのでそのつど教えてやってほしい、えんぴつの噛み跡がひどいので噛んでいたら注意してほしい、間違いを嫌がるのでプリント類は×を付けないでほしい、みんなの前で叱らないでほしい、先生の大きな声を張り上げる口調が受け付けられずチックになりかけているなどと訴えてくる。

特殊教育が特別支援教育と呼ばれるようになって、昔ほど子どもの中でも境界がなくなっているように感じる。ここ10年ほどで、普通学級に発達障害の子が2人、3人といるのも当たり前になった。一人ひとりに寄り添ってという時代で、発達障害の子も周りの子も一緒に育つことはいいけれど、クラスの規律との両立はきびしい。きちんと静止して挨拶させたい、真っすぐ整列させたい、なんて思いはかなわなくなる。いや、この時代、そんな集団規律にこだわるなんて昔の人だけ？　現場では、特別支援の問題がどんどん重く大きくなっている。

補助を頼んだ少人数の先生は、2年近く休んでの病休明け。メンタルヘルスもすっかり認知度が高まった。誰でもなり得るっていうから、管理職には、周りが気をつけて見てあげてと言われ、普段できるだけ他愛もない会話でコミュニケーションをとっているつもりだけど、こうしてほしいと思っても、どう伝えていいか困ることもあるのです。

＊＊＊＊＊＊

あれ？　学校って、こんな大変なことだらけだった？　でもやっぱり子どもとわいわい過ごすこの仕事が好きなんです。初めて子どもたちの前に立ったあのときから、それは変わらない思いです。

（仙台市・小学校）

●教育時評

大川小は問いかける

山形　孝夫

Ⅰ

その日、仙台は朝から霧雨だった。天気予報は、関東甲信越地方が、昨日から梅雨入りしたことを伝えていた。私は、食卓に新聞紙をひろげたまま、何気なく立ち上がって、ようやくほころび始めた庭先の谷うつぎの白い花を眺めていた。

その時である。うつぎの花の根元あたりを小さな黒いものが這うように移動しているのを見た。近づいてみると、子供の指の爪よりも、もっと小さな1匹のカエルの子だった。1匹だけではない。5匹、6匹、7匹……いやまだまだいる。数えはじめて途中で止めた。

―いったい。どこからやってきたのか。

私の家の裏手には、周囲を雑木林にかこまれた小さな沼がある。このあたりの団地に降った雨水を集め、河川に放流する遊水池の機能を備えた沼である。

―きっと沼だ。沼から這い上がってきたのだろう。

それにしても、我が家と遊水池との間には、ほとんど垂直に切り立った崖があり、コンクリートの壁がある。小ガエルたちは、どのようにその障壁をよじのぼり、家の庭先に浸入したのか。私は好奇心に押されるように、すすきの生い茂る草むらをかき分け、水辺につづく土手の斜面を降りていった。

とつぜん強い水のにおいがした。次の瞬間、私が目にしたのは、全く異様な、初めて見る光景であった。千とか二千の単位ではない。おそらくは万単位のおびただしい数のカエルの行列であった。それが土手の斜面を這い上り、垂直に近いコンクリートの壁にとりつき、一斉に陸へ陸へと移動している。私は、その場に立ち尽くし、その驚異の光景に見とれていた。大げさではなく、宇宙が繰り広げる荘厳なドラマに、不意に立ち会わされた感覚であった。

Ⅱ

その夜、水戸に住む年若い友人に電話をして、その不思議を訊ねた。生物学を専攻する友人は、即座に「間違いなくヒキガエルですね」と言った。沼の中で、卵からふ化したオタマジャクシが、カエルに変態し、雨の日、いっせいに水辺を離れるのだという。

―水辺を離れて、いったいどこにいくのですか。

―森や林です。陽の当たらない草むら、ヤブの中。要するに、餌となるミミズや昆虫の棲むところ。

―そのような場所が、どうして生まれたばかりの小ガエルにわかるのですか?

―それが不思議とわかるのです。嗅覚でしょう、視覚でないことは確かです。嗅覚の中に数十万年の記憶の地図がインプットされている。

不思議はそればかりではなかった。その小ガエルが、3・4年後には成熟する。すると今度は、繁殖のために、曲がりくねった遠い道を故郷の水辺をめざして帰ってくるという。

―そこでオスとメスとが出会うのですね。

その行程が、時には1キロも2キロもあるという。その長すぎる行程が、どれほど危険に満ちていることか。命を落とすことになるのか。

眠れぬままに、深夜、雨の音を聞いていた。想い出して、1冊の本を取り出した。故郷に帰る山村ゲリラの詩(うた)だった。曲がりくねった遙かな道を幾日もかけて歩いていく。若い頃好きだった黒田喜夫(くろだきお)の「空想のゲリラ」という詩であった。遠い昔の、忘れかけていた記憶が、生き生きと蘇り、そのリズムにひかれるように、低く声に出して読んでいく。

もう何日もあるきつづけた／背中に銃を背負い／道は曲りくねって／見知らぬ村から村へつづいている／だがその向うになじみふかいひとつの村がある／そこに帰る／帰らねばならぬ／目を閉じると一瞬のうちに想いだす／森の形／畑を通る抜路／屋根飾り／漬け物の漬け方（中略）

野垂れ死した父祖たちよ／追いたてられた母たちよ／そこに帰る／見覚えある抜道を通り／銃をかまえて曲り角から躍りだす／いま始源の遺恨をはらす／復讐の季だ／その村は向うにある

（黒田喜夫「不安と遊撃」昭和34年、第10回ＨＧ賞）

Ⅲ

黒田喜夫は、山形出身の戦後の左翼系の詩人である。私が、彼の詩に出会ったのは、大学院の終わりの頃。60年安保闘争の最中であった。全学連の国会突入で、東大生の樺美智子が殺され、若者は傷つき挫折し、闘争は分解した。

そのとき以来である。なぜか銃を背中に、故郷の山村へ帰っていく黒田の詩に心ひかれ、繰り返し、

この詩を読んだ。知られるように、戦後日本の山村革命は空想のままに挫折し、黒田のような詩だけが残された。銃を背中に復讐に向かう山村ゲリラは、超現実の空想の中にしか存在しなかった。それどころか、やがて日本中が列島改造の嵐に巻き込まれていく。革命など、もはや糞食らえだった。その後の経済成長の物語については、もう書く必要がないだろう。

人びとは夢中になって働き、金儲けに熱中した。アメリカ人だけではない。日本人もみんな「金持ち父さん」になれる、きっとなれる。そこに日本人の幸福がある、と思ったのだ。今思えば、グラス・タワーのいわゆるトリクル・ダウンという経済原理の目くらましである。それは、ひと握りの金持ちと低賃金労働者の増大をもたらす巧妙に過ぎる仕掛けであったのだ。

悪いことに、「モノ」の豊かさが「こころ」の破壊に拍車をかけた。そして、90年代のバブル崩壊と、2008年のリーマン・ショックがそれに拍車をかけた。不幸は一挙にやってきた。

Ⅳ

幸福とは何であったか。それは、いったいどこにあるのか。「こころ」の時代のはじまりであった。人間とは、なんと愚かで悲しい存在であるのか。教育行政が、たちまち国家管理の緊急の政治的課題となり、学校現場は形式的通告や指針、調査、報告に追われはじめる。本当に大事な時に、児童に手が届かない。形骸化する研修、報告書類の作成など、いったい学校とは何なのか。先生とは何であったか。先生と児童がつながっているようでつながっていない。それが、かれこれ20年余も続いている。暴力・いじめ・不登校そして自死……。こうした中で3・11の大津波が大川小を襲ったのだろうか。実態と合わない避難マニュアルが、用意周到に準備されていた。このマニュアルで、いざというとき命が守られるとは、誰も考えてはいなかった。大川小の校庭は、見えない仕方で日本中の校庭につながっているかもしれない。

仙台地裁の判決は言う。

① 大川小の校庭は、市のハザードマップに見る限り、津波浸水区域にはなく、むしろ地域に住む住民にも最も安全な避難場所として指定されていた。原告の主張する裏山への避難には、地域住民のいう土砂災害の危険が想定され、直ちに裏山へ避難しなかったことを不当とは言えない。

② ただし教員が、広報車による大津波襲来の呼び掛けを聞き、危険を予見できた津波到来の10分前の段階では、たとえ児童がけがをする危険があったとしても、津波による被災を回避するため、裏山への避難をためらうべきではなかった。欠けていたのは、まさに間一髪の決断であった。

③ 以上の理由により、児童を引率していた現場の教員に過失があったと判断する。教員個人の過失とするにはあまりにも酷だという批判もある。だが、教員の不決断は国家賠償法にいう「公務員による故意または重大な過失」にあたる、と法廷は断罪する。

この判決に対し、被告の市長と知事は、直ちにこれを不服として控訴した。「教職員に余りにも過大な責任を負わせている。全てを学校の責任にするのは行き過ぎである」と。

これが遺族の怒りに火をつけた。原告は言う。「話し合いはもう無理だ。私たちは子供の声を代弁する。救えた命だったと叫び続ける」と。他方、10人の先生たちの遺族の悲しみは、圏外に取り残されたままである。法廷の「正義」はしばしば残酷である。

結び

願望がひとつある。今となっては無用となった空想のゲリラの背中の銃を、法廷の「正義」に変え、それに「やさしさ」を添えて小さなカエルに貸してやることはできないか。成熟した小カエルが、恋人と会うために、遠い危険な道のりを、故郷の水辺に帰り着くためには、そうした「知恵」がどうしても必要であるように思われてならないのだ。

個人の小さな希望や愛も、これと同じなのではないか。なぜなら絶望を押し返す力は、死者を記憶し、そこから引き出される意味を悲しみの井戸を掘るように語りついでいくほかないのだから。忘却に対する記憶の闘いだけが、人間の魂に深みを与えて行くのだ。

追記

今朝の新聞に、思わぬ記事が載っていた。「葉ボタン飾り付け―立場越え寄り添う」というタイトルの記事だった。津波にのまれた児童の遺族と先生の遺族が思わぬ仕方で出会い、「悲しみ」を共に分かち合う話である。先生の遺族が育てた数十株の葉ボタンを大川小の旧校舎の中庭に児童の遺族と一緒に移植する。「ささやかな葉ボタンがつながっていれば、いつかすべての遺族が一つになれる。未来を信じたい」と書かれていた。(『朝日新聞』12月3日、宮城版)

(宗教人類学)

校分科会の論議から

みやぎ教育相談センター所長
寺　沢　幹　緒

毎号の「センターつうしん」に、そのときどきの相談の様子などを各相談員が輪番で報告するようになってから、早2年が経過しました。初回の執筆者は私でしたので、2年間でちょうど一回りしたことになります。

今号では、11月5日に開催された「みやぎ教育のつどい」第4分科会「不登校・いじめ・引きこもりとどう向き合うか」での論議を一部紹介しながら、不登校問題をどのようにとらえるべきなのかについて考えてみたいと思います。

不登校に向き合ってきた田尻さくら高校の実践

分科会は、田尻さくら高校の遠藤嘉和先生の「不登校と向き合って　編入生編」と題したレポート報告から始まりました。遠藤先生のレポートは、他の高校を退学して田尻さくら高校に入学してきた生徒の現況報告でした。ほとんどの生徒は元気に登校しているとのことで、「本校では前籍校で不登校だった生徒にとって、居心地がいい要素をけっこう持ち合わせている可能性が高い」と分析しています。その要因として遠藤先生が挙げたのは次の4点でした。

① 授業への満足度、達成感が高いこと
② 教師一人当たりの生徒数が少ないこと（定員割が直接の原因で授業では5～6人のこともある）
③ 制服がなく、学校生活にかかる経費が安いこと（定時制の特質）。
④ 保護者の努力

一方で、入学後も不登校が続く生徒をどうするかということと、卒業後の不登校（不出社？）をどうするかということが今後の課題になっていることも報告されました。特に、いわゆる「立派な生徒」ほど卒業後の進路先で馴染めない傾向が強いということも指摘されました。

不登校を生み出さない学校づくりを

遠藤先生の報告は、不登校の主な原因をどこに求めるかという問題を考えるにあたって、いろいろなきっかけを与えてくれたのではないかと思います。その一つが、学校の体質の問題です。私の経験からしても、全日制高校では学校生活を過ごす上での規則が細かく決められ、それを守らせることが生活指導の中心になる傾向が強いのではないかと思います。しかし、田尻さくら高校ではそうではないようです。これを遠藤先生は「ゆるい」と表現されました。参加者からの「どういう点が『ゆるやか』なのか」という質問に対して、「全体に鷹揚に構えている。授業中寝ている生徒に対しては、生徒の関心に合わせた授業を心がけているし、服装・頭髪の規制がない」と答えていましたが、こうした学校の姿勢こそが大切なのではないかと感じました。小学校で養護教諭をしている参加者からは、「小学校はきちんとさせる傾向が強く、その子のペースに合わせることは『甘やかし』ととらえられることが多い」との指摘がありました。養護教諭経験者からの「養護教諭がやっていることを『甘やかし』や『抱え込み』と現場が捉える傾向は以前からある。しかし、保健室は学校の中で唯一子どもが素のままでいられる場所。それを忘れてはいけない」との指摘がありました。

相談センターという「小さな窓」から見ていても、こうした傾向は年々強まっているように感じられます。昨年仙台で開かれた全国教研でも「保健室登校は認めない」という学校が増えていることが指摘されていました。今回の分科会でも仙台にもそうした学校があることが報告されました。中学校や高校の場合は、本人の到達度に関わらず、不登校の生徒の評定は「1」にすることが多く、「何とかならないものか」という相談が寄せられることがあります。相談センターでは、こうした事例にみられるような「学校に行かないこと＝悪いこと」という常識がいかに本人と家族を苦しめているかという現状を、報告集などで繰り返し訴えてきましたが、まだまだ浸透させるところにまでは至っていません。「常識を疑ってみることも大切だ」という参加者からの意見に共感を覚えるのは私だけではないと思います。

子どもの将来への不安と「親の会」の果たしている役割

不登校の子どもを持つ親からは「教師をやっている友人に相談したら『甘やかされているのではないか？　社会の荒波に耐え

相談センター報告（第7回）　みやぎ教育のつどい不登

ることができるのか?』と言われて不安になった」という発言がありました。太白区で活動している「不登校親の会」に参加している方からは、「かつて不登校の子どもを抱えて苦しんでいたOBが会合に来ると今のような話になる。しかし、そうした子どもたちも、今ではバイトに励んでいたり、大学に通っていたり、結婚もして幸せに暮らしたりしている。生きていれば何でもできるし、人間は最終的には自分で生きるものだ」という助言と励ましの発言がありました。

将来への不安は不登校の子どもを抱えた親の共通の悩みです。「高校に行けるのだろうか」「このまま引きこもりになってしまわないか」「自分が生きているうちは何とか面倒を見られるが、死んだらこの子はどうなるんだ」と、夜も眠れないほどの不安に苛まれるのです。相談センターでは、そうした不安に対しては、子どもを信じ、子どもに任せ、そして待つことの重要性を伝えるようにしていますが、頭では納得しても、学校に行かずに昼夜逆転の生活を送っている子どもを目の前にして、焦らない親などいません。何とかしようとすればするほど子どもとの関係は悪化していきます。そうした親にとっての救いの場所が「親の会」です。午後から話題提供していただいた「太白親の会」の会員の方からは、「太白親の会では、先の見えない日々の苦しさを共有して、泣きながら、そして笑いながら、つらいことをいっぱい出し合って、今年で21年になる。親も子どもも一緒に苦しんでいる中で親同士が話せる場所があることが大切だ」との報告があり、一緒に参加した親の会の会員さんからは「孫の不登校で一時は自殺まで考えたが、親の会に関わってから安心して家に帰れるようになって、親の会に来るのが楽しくなってきた」という発言がありました。

「登校拒否・不登校問題全国連絡会」主催の「全国のつどい」には各県や地域の親の会の方々が参加して、毎年夏に500人規模の集会を行っています。そこでも同様の話が次々に出され、参加者は元気をもらって帰っていきます。宮城県には、太白親の会の他にも、地域や学校単位で同様のとりくみをしているグループがありますが、全県的な交流はできていないのが現状です。みやぎ教育相談センターでも親の会の発展をめざして様々な努力をしてきましたが十分とは言えません。太白親の会のような取り組みをもっと広げていかなければならないことを痛感させられました。

大人が責任を負うべき問題

今年の分科会には、スクール・ソーシャルワーカーとして現場で相談活動を行っている方や不登校にかかわっている弁護士の方、教員、養護教諭を目指している学生さんなど多彩な方々が参加し、それぞれから示唆に富む発言がありました。前号の「センターつうしん（No.84）」で報告した「教育の機会確保法案」が衆議院を通過し、参議院で審議中です。不登校を個人の問題としてだけとらえるこの法案のような見方の問題点が浮き彫りになった分科会だったと思います。私は、分科会の論議を聞きながら、相談センター発足時の「（不登校は）子どもの問題というより、大人が責任を負うべきこと。大人が原因で起こっていると仮定すれば、治療はまず大人に対し行わねばならぬ」という総括文（『総合教育相談センター報告集第2号』（1984・5・21発行））を思い出していました。この総括はみやぎ相談センター発足以来の一貫した方針であり、今後も堅持しながら相談活動を進めていかなければならないと肝に銘じているところです。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022—272—4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき9時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間，休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

おすすめ映画

右寄りの今、「この世界の片隅に」

『夕凪の街・桜の国』こうの史代 作

軍港呉市へ嫁いだ浦野すずの戦時中の生活を描いたアニメ映画である。宮崎映画に流れをくむ作画は、美しく、当時の現地を徹底調査し再現したという呉や広島の町並みのリアルさには、片渕監督以下制作者の並々ならぬ志を見て取れる。

少女すずの宝物は2本のチビたエンピツだ。だけどそのエンピツからくり出される絵は奇想天外、写実的にも上手で妹は大喜びだし、写生の時間に先輩に描いてあげた海の絵には、沢山のイナバの白ウサギが飛び跳ねていた。そして少女は数分で大人になる。

嫁いだその日からすずは一家の切り盛りをする。義母は足が悪く、出戻りの姉はきつい。とんとん隣組の集まりにも出なきゃない。配給はわずか。2匹の小イワシを切って数を揃えて出す。道ばたの野草をまな板にのせて食卓に色と味わいの一工夫を心がける。畑仕事にだって勤しむすずだ。収穫した大根が軒に吊されて、北條家は戦時下でも平和だ。

やがて空襲警報が、生活の一部になる。そのたんびに竈の火を指さし点検してから逃げるすず。動作の緩慢さに吹き出してしまう。停泊中の軍艦が襲われる。海にたくさん魚が浮いたと満面笑顔で魚の煮付けを皿に盛る無邪気なすず。市内に買い出しに行き、色町に迷い込んでしまうすずは、色町の色も知らない。グラマンの機銃掃射によく逃げられないすずの手を引きたい。まだまだいろんなすずが描かれ、愛おしく愛おしくなっていく。

悲しい出来事も描かれている。すず自身にも見るに堪えないことが起きる。だが最後までこの映画は感動ポルノに陥ることなくタイトル通りに終わっていく。すずは朝ドラの『トト姉ちゃん』や『べっぴんさん』の才気ばしったヒロインにはならなかった。

エンドロールを観てると、ふっと「ヒロシマのうた」のヒロ子のことが浮かんだ。今、教科書に残ってるのが奇跡に思えるほど、右寄りになってない？

（加藤修二）

センターの動き

〈10月〉

1日　みやぎ教育のつどい実行委員会

4日　田中武雄さん来仙。春日さんと「教師・三島孚滋雄」の構想の打合せ

11日　つうしん85号特集の内容を相談するため数見さんと山岸さんに協力要請

14日　事務局会　つうしん84号発送作業・今を生きる仲間へ薦めるシリーズ第1弾発行。川野理夫さんの「教師になる息子への手紙」

15日　午前：「教育」を読む会（6名）特集「学習指導要領の新たな変質」を輪読。午後：第2回こくご講座、低学年「かさこじぞう」8名、高学年「大造じいさんとがん」10名

17日　哲学講座 sirube 参加11名6回続いたエミールを読了

19日　中村桂子さんから講演記録の最終校正が届く

23日　県教委・市教委へ出向く。樋口陽一さんの高校生公開授業の後援申請提出

25日　第2回運営委員会。輪番の報告は川名さん。「子ども と教育をめぐる情勢」を簡潔に話していただく。代表運営委員を中森先生から数見先生に引き継ぐ。中森先生は顧問で残っていただく

28日　第11回事務局会

29日　フォーラムNo.8「子どもの育ちと『食』」開催。20名をこす参加で充実した内容

31日　午後ホームページ運営のアットシステム伊東さんとセンターHPのリニューアルについて相談

〈11月〉

1日　新しい印刷機搬入。こくご講座準備会。考える作品は低学年は「モチモチの木」高学年は「ヒロシマのうた」

4日　ブックレット脱稿。500部印刷で発注

5日　みやぎ教育のつどい1日目。課題別分科会に菅井、助言者で参加。10名の参加、発達論を中心に話し合う

6日　みやぎ教育のつどい2日目

11日　第12回事務局会

14日　県教委より、高校生公開授業の名義後援の件で連絡。内容は良いが後援の条件で公募40名に問題ありとのこと。何人なら可なのかと質す

16日　仙台市教委より、講演資料（レジュメ）の要求。講師の樋口さんにも失礼な話であり提出は無理と伝える

18日　4回目となる「3・11を考えるつどい」打合せ。大川小訴訟の判決がでたこともあり、今回は大川小のことをメインにみんなで考えると方向ですすめることを確認

19日　会館理事長と懇談。将来像や今後の展望など率直に話し合う。つうしん特集の座談会をもつ

21日　哲学講座 sirube 参加12名。ドイツ古典期、近代の学校教育運動を学習

22日　市民の会主催のアーサー・ビナード講演会の案内チラシ完成

25日　東北大学に公開授業の会場借用届け提出。午後から第13回事務局会

26日　「教育」を読む会。特集「アクティブ・ラーニング」について討議

27日　道徳教育研究会。戦後の学習指導要領と道徳をめぐる論争について考える

29日　こくご講座準備会。春日さんに依頼した全体会「物語文を読むために」の内容検討

〈12月〉

3日　午後、民教連「冬の学習会」案内の発送作業

4日　9条の会講演会会場で、公演後の樋口陽一さんと公開授業の打合せ

6日　林和人（向山小）公開授業。教材はかけ算。林さんのていねいな教材分析と、真剣に立ち向かう子どもたちの眼差しに感服

7日　第4回「3・11を考えるつどい」2回目打合せ

9日　第14回事務局会。高校生公開授業に受講申し込み（3名）で出足良し

10日　午前、みやぎ教育のつどい実行委員会。午後から第3回こくご講座

12日　哲学講座 sirube 参加10名。カントの第1回目。仙台市教委から名義後援承認の通知

13日　江島さんから新しいHP用のロゴ案12枚届く

16日　高校生公開授業で仙台一高校長を訪問。午後、村井由美さん（古川4小）の公開授業に参加。「ヒロシマのうた」を読み合う。信頼し合った教師と子どもの姿が印象的

21日　河北新報社に高校生公開授業の取材要請

23日　アットシステムの伊東さんから。ホームページの新デザイン届く

26日　「教育」を読む会。久しぶりに本田さん復帰

27日　仙台一高から公開授業に8名まとめての受講申込み

28日　つうしん85号特集原稿すべて入稿。発行は年明けに

（菅井）

発行：（一財）宮城県教育会館　みやぎ教育文化研究センター　2017・1・10　発行責任者：菅井　仁
〒981-0933 仙台市青葉区柏木 1-2-45 フォレスト仙台4F　TEL 022-301-2403　FAX 022-290-4026
http://mkbkc.forestsendai.jp　e-mail:mkbkc@forestsendai.jp